

「主に感謝できたらいいな」

「情けは人の為ならず」という、誤解を招きやすい諺があります。「情け」とは、親切とか同情とか憐れみとか、そういう他者に対する優しい感情のことです。で、そういう優しい「情け」は、人の為にはならない、というのがこの諺が言わんとしているところです。じゃあ、人に親切にするのをやめた方がいいのか、ということになりそうなのですが、この諺の本当の意味は、そういう親切な気持ちは、他者のためじゃなくて、巡り巡って、自分の為になるんだよ、ということなんですね。・・・ならば、もっと分かり易い言い方をすれば良いのにとったりもします。「情けは巡りて己が為となり」とか、そういうストレートな表現じゃダメだった理由があったのでしょうか。

神様に情けを掛ける・・・、という言い方は、とても神様に対して失礼かも知れません。でも、神様に対して、気持ちを向けて、神様の御心や、御計画に思いを馳せて、そして感謝を憶えるということとは、まさに「巡りて己が為となる」という結末に至るんじゃないかと、私は考えています。

世知辛い毎日、争いの消えない世界、いざこざが絶えない社会。神様がいてくださるとして、じゃあ、なぜそんな理不尽と不幸が起こるのか、と考えたくなるのは、自然なことです。神様は、そういうことを考える理性を私たちにお与えになっています。ただ、そんな理不尽と不幸と、理性と信仰の交わる日常の中で、私たちが気付くべきなのは、「それでも、今、落ち着いている」という幸いがあることです。

今、戦争の渦中にある人たちには、その人たちにしか分からない信仰があり、確信があるでしょう。今、借金に追われ、最愛の人に先立たれ、人生最大の失敗をしている人には、その人にしか分からない信仰があり、確信があるでしょう。そういう、何かの渦中にある人まで想定して、全てを

包み込むような信仰や神学を考えようとしても、それは土台無理な話です。戦争中には戦争中の信仰があり、不幸には不幸の信仰があり。幸いにして炎天下にも関わらず、クーラーの効いた礼拝堂で、落ち着いて主の御言葉に耳を傾けていられる私たちには、理解の及ばない信仰理解が、世界にはたくさんあります。それは、認めないといけません。私たちは、今、主の御言葉を聴いているけれど、世界の皆が皆、同じように聴いているわけではない、と。

敦賀教会 120 年を振り返って、その最初期における、教会堂もない、幼稚園もない。そして、礼拝をしようものなら、乱暴狼藉が割り込んでくるような日々があったことを思うと、「試練」や「感謝」や「恵み」という言葉の意味は、今の私たちが知る意味とは、大きく異なっていたであろうことは、容易に想像がつきます。その後の、敦賀教会の発展期のことも含めて考えてみると、さらに神様の恵みについて、神様への感謝について、それらの意味が変わってきたことは明らかです。礼拝出席数が 80 人を数えた時代。教会学校に至っては生徒数 100 人以上が普通で管理監督がとても大変だった時代。教会幼稚園には、200 人近い子ども達が大挙して通っていた時代。そのような時代と、今を比べてみると、じゃあ、神様の恵みは減ってしまったということなののでしょうか。神様の福音が変化したということなののでしょうか。

個人的には、礼拝出席が 80 人から 30 人になっても、教会学校が 100 人から 10 人になっても、幼稚園の園児の園児数が 200 人から 60 人になっても。でも、感謝を忘れないでいたいと思います。ここには武力行使を伴う戦争はなく、暴力や詐欺によって虐げられている人も無く。少なくとも、教会や幼稚園にいる間は、世知辛い日常から離れて、心を落ち着け、御言葉によって将来への安心を感じ、讃美歌によって神様への信頼を新たにすることができます。数字がどう変わろうと、社会がどう移ろうと、ここは、昔も今も、神様の御守りと、イエス様の愛を感じられる、ホッとできる場所です。「それでも、今、落ち着いている」と感じられる場所です。

聖書の御言葉と、自分が生きているこの時代とを結びつけて、「それでも、今、落ち着いている」という恵みを感じていたのは、私たちだけじゃありません。今日の聖書箇所が含まれる歴代誌という古い書物を書いた人も、それを最初に読んだ人たちも、時代を超えて実現する、神様の御守りと平安を経験した人たちでした。

歴代誌上と下というのは、分類としては歴史書であり、昔の出来事を伝えることを目的した書物です。ただし、そこに記されているのは正しい史実かと言われると、かなり信仰寄りになっていることは否めません。しかし、そうだからこそ見えてくる、人の正直な願いと、神様の御計画があります。この歴代誌上 16 章 28～36 節は、正式な時代考証としては、紀元前 4 世紀頃のバビロン捕囚後に書かれたものだと言われています。ようするに、信仰の共同体が、とても大きな危機を経験して、それを乗り越えた後に書かれたものだということです。しかし、書かれている内容は、ずっと古くて、ダビデ王が活躍した時代、紀元前 10 世紀ごろのことです。紀元前 4 世紀に、紀元前 10 世紀のことを書いている、つまり、およそ 400 年古い時代のことを、まとめ直して文章としているのです。すると、どうなるかと言うと、当然、正しい歴史認識というより、400 年の時代差を反映した、ある程度の歴史解釈を含んだ文書になるということです。

今日の聖書箇所には歴史解釈、つまり正しい歴史の記述ではなく、後の時代における編集や改変が含まれていると思って、読み直してみますと、何故これほどまでに、「主に栄光を帰せよ」とか「御前におののけ」とか「主こそ王」とか「恵み深い主に感謝せよ」とか、神様を讃美する御言葉が多いのか、ということが少し分かってきます。

今回の聖書箇所は、バビロン捕囚という大きな試練を経験した時代にあって、神様の祝福と恵みを最も感じられたダビデ王の時代を振り返って、書かれたものです。それは、言い換えるなら、この敦賀教会が礼拝出席 20 名程度で少々寂しさを憶えている時に、かつての大人数の時代を思い出

して、神様の祝福を再確認するようなものです。・・・ように、今から 1500 年前の信仰者たちも、さらに遡ること 400 年前の栄光を思い出して、励まされていたということです。それが、歴代誌という形で聖書に収録されているんですね。

では、私たちは、この聖書的事実をどう受け止めるべきでしょうか。紀元前 1000 年の神様による大繁栄、ダビデ王の豊かな治世。その後、400 年経って降り注いだバビロン捕囚という大悲劇、屈辱の出来事。そして、それを乗り越えて、かつての栄光を思い出して、神様の御業を再確認して、新たに信仰の歩みを強めようとしている人たちがいたこと。その聖書のメッセージを、私たちはどう受け止めるべきでしょうか。

「恵み深い主に感謝せよ」と。確かに聖書は一方的に命令します。私たちが置かれた、それぞれの現状や境遇を一切勘案せずに下される神様からの御命令です。でも、その命令が揺るぎない歴史的な事実に基づいているなら。また、神様の御計画によって未来に約束されていることなら。私たちは、現状や境遇を嘆くよりも、神様に全てを委ね、信じ抜いて「結果オーライで、感謝できたらいいな」というくらいの心持でいられた良いんじゃないかと思います。神様の御計画を信頼するが故に、いつも明るく朗らかな感じで日々を過ごすのが、目下、相応しい信仰者の振る舞いなのではないでしょうか。それは決して楽観的なわけではなく、主に感謝して過ごすことで得られる祝福と恵みがあると信じて、絶望に飲み込まれず、塞ぎ込まず、信仰者としての魅力を忘れずに過ごす、ということです。

旧く敬愛すべき信仰の先達が、悩み、案じ、しかし、なお希望を見据えて、信仰を繋いでくれたように、私たちも、目の前にある数多の課題に悩みつつも、なお主にある希望を見出して参りたいと思います。少子高齢化、信仰継承の難しさ、教勢低下という目下の課題について、「でも、まあ、なんとかなるさ、だって、神様がいるのだから！」という信頼を新たに、感謝と元気を忘れず

に歩いて参りましょう。その信仰の姿が、神様に委ねる姿勢が、この現代社会に著しく欠けている「将来への見通し」を補うものだとして受け止めて。キリストの香りを纏い、キリストの使者として、この社会に福音を伝える者となることができますように。隣にいる人を励まし、笑顔にすることができますように。そして、あなたに感謝して日々を過ごし、喜びの内にその生涯を終えることができますように。と、心から願うものであります。

最後にお祈り致します。

神様。

今日も私たちをこの礼拝に招いてくださり、感謝致します。悲しいニュースや憤りを憶えるような出来事が耳に届くような、そんな毎日です。批判や不満を言い出したらキリがないというのが、今を生きる人たちの正直な心の声であると思います。けれど、あなたは、そんな毎日であって、必ず良いものを備えて、私たちを励まし、力づけてくださいます。今日、こうして礼拝堂に集えたことも、あなたの御恵であると信じます。どうか神様、一生懸命に生活している全ての人たちの上に、豊かな祝福と幸いを注いでください。あなたへ感謝したくなる喜びを備えてください。あなたが生きて、存在していることを、日々の励ましとして受け止め、いつも明るく朗らかに歩いてゆくことができますように。どうか支え導いてください。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。

8月召天者を憶える祈り

聖書朗読 ヨハネの黙示録 7章 13～17節

すると、長老の一人がわたしに問いかけた。「この白い衣を着た者たちは、だれか。また、どこから来たのか。」そこで、わたしが、「わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです」と答えると、長老はまた、わたしに言った。「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。それゆえ、彼らは神の玉座の前にいて、昼も夜もその神殿で神に仕える。玉座に座っておられる方が、この者たちの上に幕屋を張る。彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽も、どのような暑さも、彼らを襲うことはない。玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導き、神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれるからである。」

山口サキ姉	やまぐち さき し	(1974年8月1日)
山本眸姉	やまもと ひとみ し	(2024年8月2日)
笹本純一郎兄	ささもと じゅんいちろう けい	(1937年8月11日)
山口寅雄兄	やまぐち とらお けい	(1975年8月13日)
橋本 操姉	はしもと みさお し	(2022年8月21日)
柴田キヌ姉	しばた きぬ し	(1951年8月21日)
寺島達夫兄	てらしま たつお けい	(2003年8月23日)
松木ひで姉	まつき ひで し	(2002年8月29日)

8月召天者を憶える祈り

神様。私たちは今、来る8月に天へと帰って行かれた方々を憶えて祈りを合わせています。私たちの心の内には、天上で和やかに過ごされているであろう親しい方のお顔が浮かびます。今生の別れを経験して尚、あなたの下における親しい方々との再会の約束があることを感謝致します。天にあって、地にあって、あなたは私たちをひとつにしてください。8月はここ日本にあって、この世界の平和を、特に心に留めるべきひと月でもあります。先に召された方々から、この世での務めを受け継いだ私たちは、世界の平和を実現するという尊い業をも継承致しました。たとえ、その実現が困難だとしても、平和の使者としての歩みを全うすることができるよう、私たちの日々の信仰を支え導いてください。

天の上には永久の平安がありますように。そして、地の上には豊かな慰めと、平和へと至る道筋をお与えください。この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。